2023年度名古屋学芸大学健康・栄養研究所　研究・実践報告

■研究・実践の課題（テーマ）

子ども食堂におけるヤングケアラーへのかかわりに関する研究

■主任研究者　安達内美子

■共同研究者　藤丸郁代、平野華菜

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【研究の目的】

一般社団法人ヤングケアラー連盟（2010）によると「ヤングケアラー（以下、YCという）は、家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」と定義されている。全国の実態調査（2021）によると、YCは小学6年生の6.5%、中学2年生の5.7%、全日制高校2年生の4.1%と各年齢層に一定の割合でYCが存在すると報告されている。一方、YC本人がYCであるという自覚は3割にとどまっており、本人がYCとして認識が低いことが指摘されている。YCはケアをしているときだけの問題ではなく将来の子どもの健康や生活に重大な影響を与えるという深刻な問題となっている。このことからYCを周囲の大人が早期に発見していく必要がある。YCはケア対象やケア内容などさまざまな背景があることから保健、医療、福祉、教育の多くの専門機関が連携をとりながら支援すすめていくことが必要であり、その支援体制づくりが喫緊の課題となっている。

「子ども食堂」とは、子どもが一人（保護者も含む場合もある）でも安心して来られる無料または低額で食事を提供する非営利活動のことである。子ども食堂は、YCの支援体制の連携機関のひとつとして期待されている。

そこで、研究目的は、子ども食堂がヤングケアラーまたはヤングケアラーの可能性があると思われた子どもにかかわった状況を把握し、今後の支援機関の連携を検討することとした。

【方法】

愛知県内子ども食堂206か所の担当者を対象に、2024年1月～2月の間に無記名自記式質問紙調査を実施した。対象者には、説明書および調査票を郵送し文書にて研究の概要を説明した。回収は、返信用封筒にて返送してもらう方法とインターネット調査画面にアクセスして回答する方法の 2 つの方法によってデータを収集した。質問項目は、子ども食堂の基本属性（活動地域、運営主体、開設した時期、活動回数・状況、参加対象、1回の参加人数、連携している機関）、相談の経験、子どもからの相談およびYCとのかかわりの経験と対応状況、YCの気になる点、相談しやすい支援機関である。分析方法は、それぞれの項目を単純集計し、子ども食堂の連携機関との状況別に子ども食堂の特性、子どもからの相談の程度やYCとのかかわり子どもの経験、対応の状況などの項目を比較検討することとし

た。倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：739）。

【経過と今後】

2024 年 3 月 16 日現在、102 件の調査票の回収（回収率 50.7%）があり、回収率は高かった。子ども食堂において、ヤングケアラーの関心の高いことが示唆された。これから調査内容を詳細に解析していく予定である。